

## 十二指腸空腸「ヘルニア」ノ一例

同時二十二指腸擴張、十二指腸支腔ヲ併有スルモノ

### Ein Fall von Hernia duodenojejunalis mit Dilatatio duodeni und Diverticulum duodeni.

Von Dr. K. HIROTA.

Aus dem anatomischen Institut der Kaiserlichen Universität zu Kyoto.

京都帝國大學醫學部解剖學教室

大學院學生 醫學士 廣田耕作

十二指腸空腸「ヘルニア」(Hernia duodenojejunalis = Treitz's Hernia)ハ内「ヘルニア」(Innere Hernien)ノ最大多數ヲ占ムルモノデアツテ、後腹膜「ヘルニア」(Hernia retroperitonealis)ノ一種デアアル。

一七七六年ニ Neubauer ガ初メテ之ヲ記載シテカラ一九二三年 Nagel ノ調査迄約百例デアアル。Nagel 以後一九二五年ニ Lower, Higgin ノ二例ガアル。本邦デハ三宅速、淺原慎次郎兩氏が各一例ヲ經驗シ余ノ一例ヲ加ヘテ三例トナル。

此ノ「ヘルニア」ノ大多數ハ剖檢或ハ解剖實習ニ際シ、偶然發見サレタモノデアツテ、手術時ニ發見サレタモノハ甚ダ少數デアアル。又臨床的ニ診斷サレタモノハ數例ニ過ギナイ。余ノ例モ亦死後偶然發見サレタモノデアアル。

斯ク本症ガ正確ニ診斷サル、コトノ少ナイノハ本症ハ通常重キ症狀ヲ起サナイ從ツテ本症獨特ノ兆候モナイ、又急性症狀ヲ起ス場合ハ極少數デアツテ他ノ腸管閉塞症ト區別ガツカナイ。

ソレデアアルカラ本症ハ不明ノマ、ニ看過サレ或ハ誤診ノマ、ニ經過スルコトガ最も多イノデアアル。サレバ本症ハ事實ニ於テハ更ニ多カルベキデアアル、ガ然シ矢張稀有ノ病症デアツテ報告ノ價値アルモノデアアル。

標本、屍番號、三五四四。堀井藤次郎、六五歳、男。大正三年大阪府堺分監(監獄)ニ於テ死亡。臨床的診斷、腎臟炎、病床日誌、不詳。

標本ハ十四年前、加門教授ノ採集セラレタモノデアツテ、橫隔膜ノ上界ヲ界トシ軀幹ノ上半ヲ切り離シ、兩下肢ハ股關節ニテ關節離斷ヲ行ヒ、腹部ハ皮膚ノミヲ剝離シテ軀幹ノ下半ヲ酒精中ニ保存セルモノ(恐ラク屍體ニハ當初稀薄ナ「フアルモール」液ヲ注入シタルモノナラン)。

腹部ハ全般的ニ輕度ノ膨隆ヲ示シテ居ルガ、部分的ニ隆起或ハ陷没ノ箇所ヲ見ナイ、又心窩部モ陷凹シテ居ナイ。

臍圍約六四糎、臍ヨリ劍狀突起ノ底部迄約一五糎、臍ヨリ耻骨聯合上緣迄約一四糎。臍ノ左下緣ニ於テ交叉スル出來ル丈ケ大ナル十字切開ヲ以テ腹壁ヲ哆開シテ見ルニ、腹壁ノ内面ニハ何等ノ異狀モナイ。大網膜ハ露出部全面ヲ被覆シテ居テ、其ノ上下ノ長サ約二〇糎、左右ノ幅約二〇糎、全體トシテハ殆ンド變化ヲ認メナイ。唯僅カニ盲腸部ニ於テ輕度ノ癒着ガアツタ。此ノ癒着ハ指頭ニテ易ク剝離スル事ガ出來タ。ソコデ大網膜ヲ上方ニ翻轉シタニモ拘ハラズ、小腸及ビ靜脈皺襞(Plica venosa)ヲ見當ラナイ。加之、腹腔内ハ殆ンド全部、内容充實セル一大球狀ノ囊ヲ以テ充填サレテ居ル。

囊ノ右、上、左ノ三方ハ結腸ニ接シ、下方ハ膀胱ノ體部ニ輕ク接シテ居ル、シカシ骨盤腔内ニキツク陷入シテ居ナイ。

此ノ囊ハ菲薄ナ灰白色ノ膜カラ出來テ居テ、大部分ハ半透明デアツテ、内容タル小腸ヲ透明スルコトガ出來ル。然シ其ノ左ノ邊緣ハ淡褐色、不透明、且ツ著シク肥厚性ヲ帶ビテ左結腸曲以下、下行結腸ノ獨立紐部ニ堅ク附着シ、紐部ヲ陰蔽シテ居ル。囊ノ表面ノ周邊ノ界ハ何等特別ノ境界ヲ認ムルコトナシニ結腸間膜トナツテ居ル。即チ上界ハ橫行結腸間膜

トシテ獨立紐部ニ及ビ、左界ハ下行結腸間膜トシテ獨立紐部ニ癒着シ、下界ハ左腸骨窩内ニテ下行結腸間膜トシテ字狀結腸間膜トノ境界ニ及ンデ居ル。

然ル後、囊ヲ内容ト共ニ左腹部ニ強ク壓排シテ囊ノ右界ヲ檢ベテ見ルニ、右上半ハ横行結腸間膜、上行結腸間膜ニ移行シ、右下半ハ一ツノ大ナル孔トナツテ居ル。

此ノ孔ハ略ボ圓形デアツテ、凡ソ矢狀面ニ存在シ、孔ノ前縁ハ靱帶様ヲ呈シテ居ル。其ノ上下ノ徑ハ約五糎、前後ノ徑ハ約四糎正中ヨリ約一糎左方ニ離レ、上極ハ第三、第四腰椎間軟骨高、下極ハ第五腰椎ノ中央ノ高サニ位シテ居ル。此ノ孔ハ唯一條、輸出腸管デアアル廻腸ノ終末部ヲ絞扼シテ居テ、尙ホ優ニ三指ヲ通過セシムル事ガ出來ル。此ノ孔ヨリ外ニ在ル廻腸末部ハ約七糎デアアル。

孔縁ヲ剖檢シテミルニ、其ノ前縁ニハ下腸間膜靜脈 (V. mesenterica inferior) ヲ見出ス、即チ此ノ部ハ靜脈皺襞ナル事ヲ證スル。上縁ニハ上腸間膜動靜脈 (A. u. V. mesenterica superior) ヲ見出ス、即チ此ノ部ハ腸間膜根部ガ上十二指腸空腸皺襞 (Plica duodenojejunalis superior) ト癒着シテ居ル。後縁ハ後腹壁デアツテ其ノ裡ニ下腸間膜動脈 (A. mesenterica inferior) 及ビ腹部大動脈 (Aorta abdominalis) ガアル。下縁ニハ左結腸動脈 (A. colica sinistra) ガアツテ此ノ動脈ト下腸間膜靜脈トノ交叉スル事ニヨリ孔ノ下界ハ堅實ニ支持サレテ居ル。コレニヨツテ此ノ孔ハ靜脈窪 (Recessus venosus) ノ口ニ相當スルコトヲ證スル。

囊ノ内容、屍體ハ比較的硬化シテ居ルカラ囊孔ヨリ順次ニ小腸ヲ引き出スコトガ出來ナイ。ソコデ囊ヲ廣ク切開シテ内容タル小腸ヲ檢ベテ見ルニ、何處ニモ著變(捻轉、鉗頓、狹窄、支腔、異物等)ヲ見出サナイ。ソコデ小腸ヲ孔内ヨリ孔外ニ順次繰リ出シ、整復ヲ試ムルニ易ク之ヲ行フ事ガ出來タ。空廻腸ノ全長ハ其ノ凸側縁ニ於テ約四九六糎デアアル。其ノ幅員(腸管ガ比較的ニ硬化シテ帶狀ヲ呈シテ居ルカラ其ノ口徑ヲ測ラズ、單ニ幅員ノミヲ測ル)空腸部最大約五糎、最小約三糎、廻腸部最大約三糎最小約一・五糎。尙ホ腸間膜ノ幅員ノ最大部ハ約一〇糎デアアル。

囊底ハ盆狀ヲナシ、後腹壁、左腎臟ニ接シ、其ノ上界ハ胃ノ下面右界ハ第二以下第五腰椎、左界ハ腹壁、下界ハ腸骨縁デアアル。

結腸ノ長サハ其ノ凸側(游離縁)ニ於テ、上行部約二五糎、横行部約四七糎、下行部約一八糎、S字狀部約二五糎デアアル。盲腸及ビ蟲様突起ハ其ノ位置、大サハ尋常デアアルガ、二者共ニ腸骨ニ相當強ク癒着シテ居タ。ソレガ爲メ相當力強ク且ツ注意シテヤツト之ヲ損セナイヤウニ指ニテ剝離スルコトガ出來タ。コレニヨツテ此ノ部ニ於テ相當ノ病的變化ノアツタコトガ知ラル。又下行結腸獨立紐部ニ於テ變化ノアツタコトハ上述シタ。

十二指腸ハ第二腰椎ノ高サ、正中ヨリ右方ニ約四糎離レタ部ニ初マリ、全體ノ形ハ蹄形狀ヲナシ臍頭ヲ抱擁シテ居ル。其ノ下行部ハ腰椎前ヨリ右方ニ離レテ第四第五腰椎間軟骨高迄下リ、上行部ハ第四第三腰椎ノ右前方ヲ上リ、第二腰椎ノ右前方ニテ十二指腸空腸曲ニ達シテ居ル。其ノ周圍ニ於ケル諸臟器トノ相對的關係ハ、上半ニ於テハ略ボ尋常デアアル。然シ下半ニ於テハ深ク腸骨窩ノ中央迄垂下シ、上行結腸ノ初部ノ背壁ニ密接シテ居ル。即チ十二指腸ノ初部ノ位置ハ尋常ヨリ右下方ニ偏シ其ノ下端ハ尋常ヨリモ約一腰椎丈垂下シテ居ル。形ガ蹄形狀デアアルカラ三部ノ境界ハ判然シナイ、然シ凡ソ三部ニ相當シテ其ノ突側ニ沿フテ測ツテ見ルト上部約九糎、下行部約一二糎、上行部約一〇・五糎。全長二一・五糎デアアル。其ノ幅員ハ上部約四糎、下行部ノ下端約五糎、上行部ノ上部約二・五糎。コレニヨツテ十二指腸ハ異常ニ擴張シテ居ルコトヲ知ラル。

上述ノ如ク十二指腸擴張ト十二指腸空腸「ヘルニア」トガ因果的關係アル事ニ就テハ既ニ「*Verd.*」モ之ヲ記シテ居ル。本例ハ會々ソレニ一致シタ一例デアアル。

其ノ他ニ尙ホ本例ニ於テハ下行部ニ於テ其ノ左右兩側ニ各一個ノ支腔(Diverticulum)ヲ具有シテ居ル。左側ノモノハ臍頭ノ背側ニアツテ其ノ大サ臍頭大、長サ約四糎、異物アリ(切開シテ見ルニ大根漬ノ一片臍頭大ノモノ)。腔孔ハ臍指ヲ通過セシムルコトガ出來ル。

右側ノモノハ其ノ大サ小指頭大、長サ約三糎、腔孔ハ小指ヲ通過セシムル事ガ出來ル。

支腔ノ壁ハ左右ニ著シク菲薄デアツテ膜狀ヲ呈シテ居ル。

十二指腸支腔ハ決シテ稀ナモノデハナイ。既ニ鈴木文太郎氏ハ二十四例中二例ヲ認メタコトヲ記サレテ居ル。

十二指腸乳頭ハ兩支腔ノ腔孔ノ中間ニ在ツテ何ノ異常モナイ。

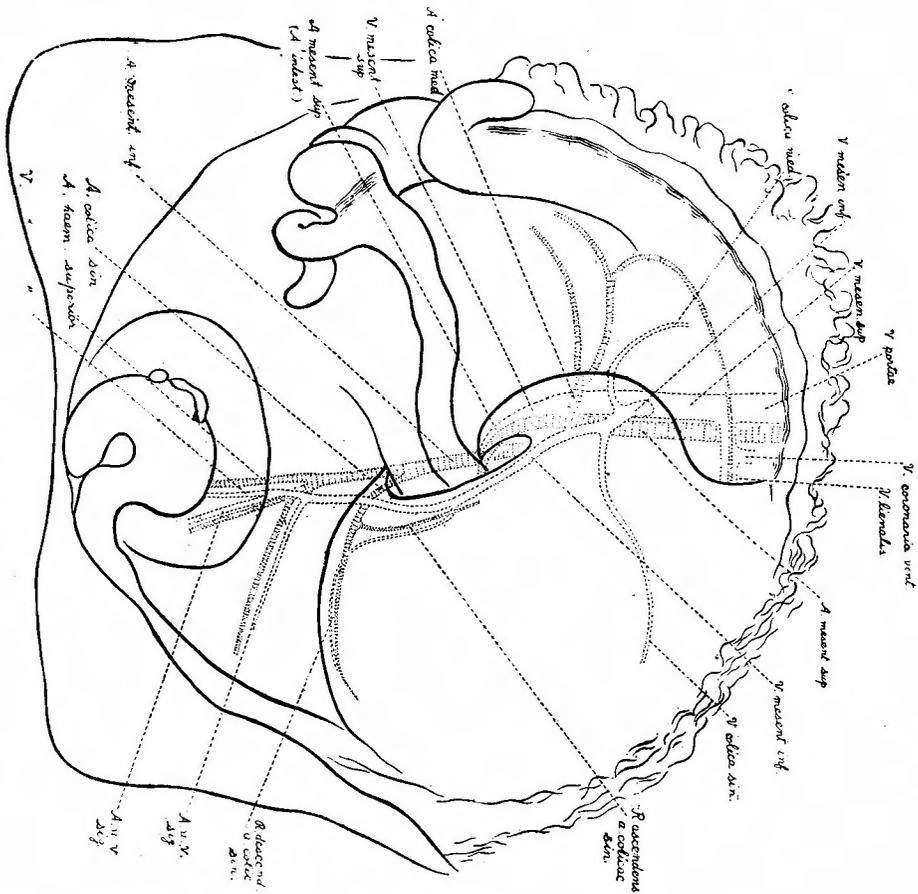
本例ハ十二指腸腔腸ヘルニアノ定型的ノモノデアツテ且ツ十二指腸擴張、十二指腸支腔ヲモ併有スル稀有ノ例デアアル。

擱筆スルニ臨ミ貴重ナル標本ニツキ研究ノ自由ト、且ツ懇篤ナル指導トヲ賜ツタ恩師足立文太郎先生ニ對シ、謹ンデ感謝ノ意ヲ表スル次第デアアル。

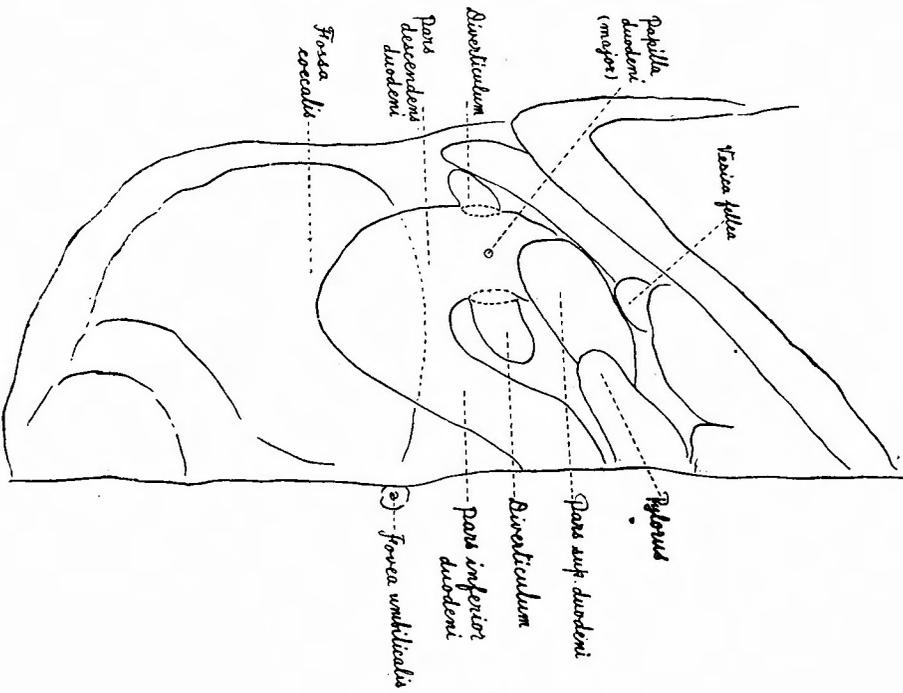
Literatur.

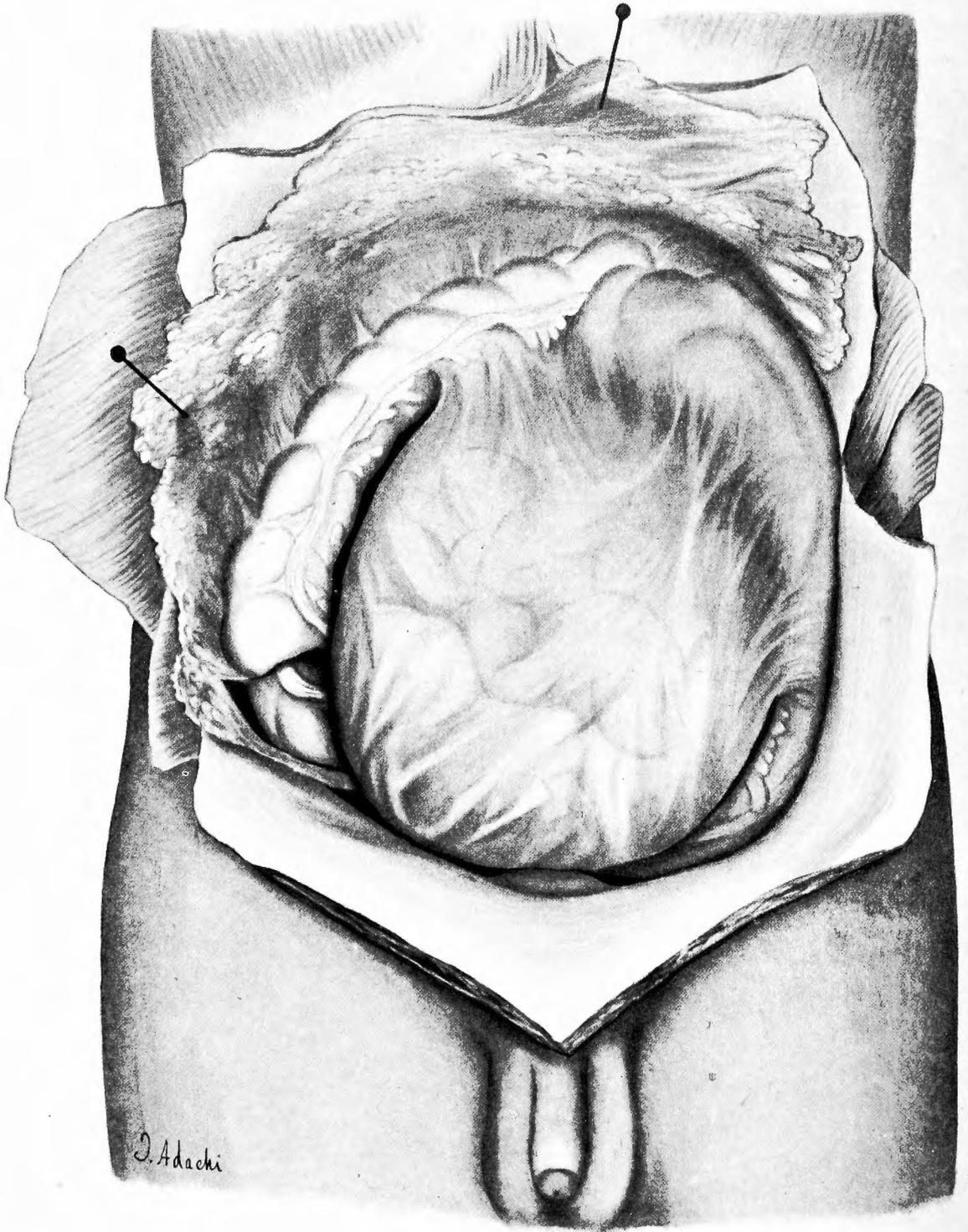
- 1) Wilms: Hernia duodenjejunalis (Treitz). Deutsche Chirurgie. Lf. 46g. S. 387. 1906.
- 2) 高安達成: 十二指腸空腸ヘルニア。日本外科全書卷九. 71頁. 1918.
- 3) 鈴木文太郎: 十二指腸支腔。人體系統解剖學卷ノ三. 177頁. 1920.
- 4) Nagel: Right paraoduodenal hernia. The Journal of the American Medical Association. Vol. 81. p. 907. 1923.
- 5) Lower & Higgins: Hernia retroperitoneal. (Ann. of surg. 1925. P. 576. Ref. Riv. osp. 1926. Mai) Zentralblatt für Chirurgie Nr. 48. S. 3086.

廣田論文插圖 1



廣田論文插圖 2





D. Adachi